

詩同人誌評

第5回

ひとはどこから来て どこへ行くのか

中塚 鞠子

見えた
何が
永遠が

「かつてそう書いて詩人を廃業した詩人がいた。永遠を見る幻視者になりたいと思うが、それをほんとうに見るのはこわいような気がする」と立花隆は『エーゲ』―永遠回帰の海―で書いている。この言葉はアルチュール・ランボーの詩集『地獄の季節』『錯乱』の中の詩。人間はどこから来て、今どこにいるのか、そしてどこへ行くのか、という、かつてゴッホが書いたと同じ命題を、さらに幅広く突き詰めようとするために、生と死、ヒトとサル、生命と物質、地球と宇宙の境界を知ろうと、

探求し続けた「知の巨人」は「わからないことをわかろうとしたのだ」と言っている。

今回はここから始めようと思う。詩を読むときわからない詩がある。特に若い人、超ベテランの人で。若い人は感覚だけで書き日本語の文法など無視して書く。超ベテランの人の詩は、いろんな学問・思想などが入り過ぎていて、読み手の知識が追いつけない。だからわからない。しかしよく考えれば、わからないから引かかって考える、だから面白いともいえる。懲りずに引かかってみようと思っている。

三日月ユキ「前夜」〔Rosa-Kernel〕4号

わたしがきみの
地球でいられる

最後の日

……(略)……

遊泳の糸が切れ

ねじ切れるほどの最初の重力が

きみを襲う

それは新たな大地からの

最初の挨拶

五十億年を照らしてきた天の光が

……(略)……

人間誕生の感動的壮大なドラマだろうか。人間は子宮の中で、人類発生の過程を体験するのであるから。私を地球としたことで、この詩は大きなドラマを描き得ていると思う。

夏山なお美「素数の美」〔石ノ森〕194号

素数になりたい

どんなことが襲って来ても

鳥につつかれても

狸にかじられても

平気な素数になりたい

……(略)……

私のココロを

バラバラに

割ることなんて

できない

……(略)……

わたしを

わたしのままで

……(略)……

これは人に影響を受けないで、自分自身を保つための手段。それが素数になること。素数という言葉を考えてみる。ただ鳥や狸ではなく、もう少し適切な比喻を考えてもいいのでは。

北川朱実「バス停と羊水」〔CROSS ROAD〕
19号)

海岸通りの

センダンの木の下に立つバス停

バスは

もう何年も来たことがなくて

錆びた時刻表の傷は

船底の跡だという

……(略)……

真夏の午後

バス停に

日傘の妊婦が一人立っていた

長くなるので全部掲載できないが、へ妊婦は／十年前に行方不明になった／姉に似て／来ないバスを待つて／くる日も／くる日も／沖を見ているのである。へ海が突然／強い力で羊水を／吐き出した／で終わっている。突然バス停を襲った大きな潮。生まれるはずだったものは海に呑み込まれ、ある日突然海は羊水を吐き出すのだ。ペテランの作者。さすがである。

帳華「夜は駆ける」〔現代詩神戸〕276号)

落としてまっせ！

首

追いかけなあきまへん

一所懸命なのに

追いつけまへん

あんたの首でしゃろ

まぶしくって

大声あげて

追いかけまっせ

まっせや

ほんま そそっかしいんやから

あんたしかおりまへんやろ

こんなん落とすのは

追いつけない

ほいこらほいこら

こんなん持つてたら

わたしや夜でなくなります

まっせえや！

これは謎である。夜が、落ちていている首をかかえて、持ち主らしいあんたを追っかけているのである。最近ヒットしたYOASOBIの曲に「夜に駆ける」というのがある。私も少し前「夜を走る」という詩を書いたことがある。しかし、そういうのと全く違う。この奇想天外な発想はどこから生まれてくるのだろう。

小西誠「音の来歴」〔現代詩神戸〕276号)

どこかで音がした

コトンと音がした

小さな音だが無視できない

小さな何かが外れ落ちたような音

どこで何を支えていたのかわからないが

無視できないもの

いったい何だろう

……(略)……

宇宙から届く永年摩耗し廃却された

小さな遊星菌車の悲鳴かも知れぬ

悲しみから憎しみに変わる

瞬間の音

かつて砂浜であった辺り

さらさら さらさら

指の間から こぼれ落ちる

砂か 骨か

……(略)……

ちよつとした小さな音にこだわって、その来歴をたずねる、面白い試み。一連で具体的なもの、例えば外れてはならない積み木の一片、ジグソーパズルのピース一枚から、遠く遊星菌車へ飛び、しかもその悲しみから憎しみに変わる瞬間の音、かもしれないという。二連で、砂浜の指からこぼれる、砂か骨か、となると一度に平凡になってしまう。しかし

本当に作者が言いたかったのはこの世の格差だったのだろうか。音の来歴で押した方がよかったのでは。

北口汀子「ドッベルゲンガーの罫」(RIVIERE 181号)

夕暮れの改札口を出た時
前を歩く人並みの中に私の背中を見た
背中は無防備な表情のまま私から遠ざかっていく

私の歩みはそこで止まり 冷えていく足を
見ると
すでに花崗岩の肌へと変わっていた

登山をする人は時々ドッベルゲンガーという現象に遭遇することがあると聞く。街中でその現象に遭い、自分自身の姿をみるという面白い詩。歩みが止まり肌が花崗岩に変わっているというところで、驚きがよく出ている。北口さんは哲学的な詩を書く人だ。

吉川信幸「三十六人の」(「三重詩人」257号)

三十六人の義人が地上にいなければ、神様は顔を背け、一人残らず滅びてしまう。それらの義人をなんびとも知ることは許されない。(古代ユダヤの神話より)

夕暮れの街を急ぐ
あのひとではなかつたろうか
行き交う人波にまぎれ
コートに身を包み
マフラーに顔をうずめていた

雨の公園を去っていく
この人なのかもしれない
……(略)……
あの人も
この人も
自らがその一人だなんて知らない

……(略)……
また 眠れなかつたんだね
明ける薄闇に
珈琲が灯る
……(略)……

これも不思議な詩である。義人というのは何だろう。誰なんだろう。義人がいると地上は平和なのだろうか。古代ユダヤの神話を知らないので、私は疑う。おろおろする。

北川清仁「今日」(「アリエ」208号)

ひとがもの語りを好むのは
おのれ自身が

もの語りの主人公であるからかもしれない
始まりと終わりのある

おのれのもの語りの世界 この時
人けのない通りには街路樹が影を落とし
雲はゆるやかに空を流れ
旗は風になびいている
その最初のページと最後のページのあいだ

で
ひとはその外を知りたくて
ときどき問うのだ
自分がいったいどこから来てどこへ行くの
だろうと
……(略)……

そんなことを漠然と考えていた
昨日のことだ

いま、人が語っている物語には始まりと終わりがあり、人はその外を知りたいと思う。人はどこから来てどこへ行くのか。それは見当識といわれるものである。ビッグバンから宇宙が生まれて、長い時間を経て今があるとしても、これからどうなるのか、膨張しているといわれる宇宙の外には何があるのだろうか。面白いのは、そう考えているのは昨日のことで、詩のタイトルが「今日」になっているところだ。

長嶋南子「落とし物」(天国飲屋・創刊号)

きょうは産み落とさなかつた子どもの誕生
日です

赤ん坊を産んで落とすのが母の役目で
落としたら拾われます

わたしの子どもは落としものになりませ
でした

拾ってくれる人がいなかったのです
まが玉みたいな形のままで

胎内を漂っています
……(略)……

古墳から出土されるまが玉ですから
神代の昔から産み落とされなかつた子ども

は
たくさんいたのでしょう

わたしを産み落とした人は百四年生きまし
た

きのういのちを落としました
いのちの抜け殻を拾いにきました

落としては拾われて地上はにぎやかです
わたしの棺にはまが玉のネックレスを入れ

て下さいね
何万年後に出土されて

博物館に展示されます
わたしが産み落とさなかつた子どもです

人間の命、生や死を落としものとして扱う

長嶋南子の詩を読んでいると、深沢七郎を思
い出す。人類の大きな流れの中では、まして
や宇宙の流れの中では、一人の人間の命は一
瞬のもののように思えてくる。

塩壽緑「舟をもつ指」(「アリゼ」207号)

少しばかり

石と石の間が空いていた
祖母がねむり 母がねむる

その静かな石の下

石は私の力では動かない

わずかな隙間を
風はとおり

雨は沁みて
陽が射し込む

……(略)……
姪が幼稚園で習いたての童謡を繰り返し歌

っていた

ふいに歌い止んだ先を見ると
幼子も石の隙間に気づいたらしい

指を差し入れて一枚の葉を摘まみ上げた
—お舟のような葉っぱ

……(略)……

私は彼岸此岸を行き来する舟を思い
ふたりは葉を陽にかざす幼子の指を見た
……(略)……

なにげない墓掃除の風景ではあるが、ふと
気づいた石と石の隙間。そして幼女のなにげ
ないしぐさと「—お舟のような葉っぱ」とい
う言葉が、いつそう思いを深くしている。

わたなべ麻里「知りたかった」(「りんごの木」
60号)

愛すること 希望をもつことについて
いつも知りたかった

この世が 炎なら
銃撃の 螺旋場ならば

橋の向こうには
優しい空がある筈

……(略)……
一滴でもいい

手のひらに
平和の雫をたらしてほしい

二月にロシアがウクライナに侵攻して以来、
悲惨な映像が世界中に流れながら、まるで映
像の世界の出来事のように観ているしかない
何億かの人々がいる。このように素直に気持

ちを出してもらうと、救われる気がする。

天牛美矢子「幽霊」(「交野ヶ原」92号)

あそこで待ってるね

ピスタチオ色した草の上、

一番最高だった時の夜を

君は忘れてしまったかもしれないけれど

私は丁寧に拾い集めてきた

……(略)……

エンドロールで流れていたやさしい歌は

We'll meet again[♪]

I'll be seeing you[♪]もなかった

見当はずれな答えを言う私を

死者たちは指差して笑うけど

……(略)……

ここで待っているよ

唐突に開く楽園の門を

いくつも見逃してきたけれど

最後の門までに巡り会えなかったら

どうするかは決めている

いまいち思い出せない歌の続きを

君が聞かせてくれれば良い

「交野ヶ原」は同人誌ではないので、ペテラン詩人の寄稿がメインなのだが、ついこれを取り上げたくなったのは、立花隆が数万冊の書籍を読んで、人はどこへ行くのかを知る

うとして、ついには死後の世界は無であり、
霊魂も存在しないと結論付けたのを思い出し
たからである。詩人には幽霊も存在し、霊魂
も存在するのであるから、私の好きな「知の
巨人」は詩人ではなかったのだと私は結論付
けることにした。

瀬崎祐「遺失物係り」(「交野ヶ原」92号)

人々がなくしたものはここに集まってきま
す 誰かが届けにくるわけではないのです
が いつのまにか 棚にはそれらのものが
積みかさなっています

ときおり問い合わせの電話もかかってきま
す それは遠いところからの声です たぶ
ん外の世界では雨が降っているのでしょう
みんなが濡れる夜には、なにかなくしたこ
とを思いだす人が増えるのです
でもその人たちは 失くしたものの説明が
できません その人たちは電話口で口ごも
るのです その人は何をなくしたのでしょ
うか

……(略)……
もうすっかり見えなくなってしまったものを
捜して 人々はこの場所をめざします
どこまで続いているのだろうと 訝しくな
るほどの長い螺旋階段をおりてくるのです

……(略)……

全文掲載したいくらい面白くて、瀬崎ワー
ルドに嵌まってしまいそうになる。へわたし
はこの場所ですつまでも待っています でも
誰もここへはたどり着けません。そうだ。そ
ういえば、日々いろんなことを忘れていく。
以前あったことも、あったことを忘れてしま
ったということさえ忘れてしまうのだ。

昨日喋ったことを覚えているのに、相手が
誰だったか忘れてのことさえある。恐ろし
いことだ。これは、さすがにやばいな。

沢山の同人誌惠贈ありがとうございました。

【受贈詩誌】

現代詩神戸 276号・水の呪文 54号・PO 184・
185号・ぼとり 65・66号・プライム 54号・黄薔
薇 219号・月の村志番地 12号・いのちの籠 50
号・軸 143号・凜々佳 7号・梨翠書 1〜4
号・石ノ森 194号・RIVER 181・182号・三重
詩人 257・258号・多島海 41号・ぼとり 65号・
Esca 23号・KALGA 119号・潮流詩派 269号・異
郷 59号・感情 30号・碎氷船 36号・呼吸 152
号・CROSS ROAD 19号・笛 299号・天国飲
屋創刊号・りんごの木 60号・交野ヶ原 92号・
アリゼ 207・208号・Rosa & Karne 14号・ア・テ
ンポ 61号・風のたより 24号・雲 4号・
Moderato Es